

Gold Link Corporation

GOLD FOURSEASONS REPORT 2023年春号

発行日 令和5年4月27日

目次：

2022年の世界
金需要 1

銀行恐慌 7

2022年の世界金需要

ハイライト

2022年は、年間平均が1,800米ドル/オンスと過去最高を記録しました。米ドル高と世界的な金利上昇という著しい逆風にもかかわらず、金価格はわずかに上昇して1年を終えました。第4四半期の平均価格は前四半期比、前年同期比ともに若干下がりましたが、11月に急騰して以降、年末までは回復が続きました。

活発なりテール投資が後押しし、金地金・金貨の需要は9年ぶりの高水準に達しました。中国では1年を通して新型コロナウイルス感染症関連の影響があり、需要が大きく落ち込みましたが、欧州、トルコ、中東の力強い伸びがこれを相殺しました。

インドの金需要は、パンデミック前の長期的水準と匹敵する力強さを維持しました。年初はかなり軟調だったものの、インドの消費者需要

は回復し、好調だった2021年の需要水準に迫りました。12月の最後の数週間に現地金価格が急上昇し、需要が抑制されたものの、新型コロナウイルス感染症からの回復が続いたことが前年比の数字を押し上げました。

2022年：金需要が過去10年以上で最も好調な1年に

中央銀行による大量の買い入れに、活発な個人投資家の購入やETFからの流出の鈍化が加わって、年間需要は11年ぶりの高水準に達しました。

年間金需要は18%増の4,741トンに急増しました。これは投資需要が異例の大きさだった2011年に匹敵します。第4四半期の需要が1,337トンと過去最高を記録したことが、年間総需要の力強さを支えました。

(2 ページに続く)

■世界金需要

	Q4.21	Q1.22	Q2.22	Q3.22	Q4.22	前年同期比
宝飾品	719.8	515.5	491.6	580.2	602.5	-16%
エレクトロニクス	70.6	66.2	64.6	63.2	57.7	-18%
その他	12.5	12.0	11.3	11.3	11.9	-5%
歯科	2.7	2.7	2.6	2.5	2.4	-11%
工業・歯科小計	85.9	81.0	78.5	77.0	72.0	-16%
金塊退蔵	223.9	180.6	170.6	221.2	218.6	-2%
公的金貨	73.5	84.6	70.8	89.4	90.0	+22%
メダル類	28.9	18.0	16.1	30.5	26.7	-8%
小売り投資小計	326.3	283.2	257.5	341.1	335.3	+10%
ETF・関連商品	-23.0	270.7	47.4	-244.1	-89.6	--
投資合計	303.4	553.9	210.2	97	245.7	-19%
中央銀行	34.3	88.5	185.0	445.1	417.1	+300%
需要合計	1143.4	1238.7	965.3	1199.4	1337.4	+17%

2022年の世界金需要

- 2022年の宝飾品消費は3%減の2,086トンと、わずかに衰えました。この軟調さの大部分は、金価格が高騰した第4四半期に起因します。
- 2022年の投資需要は1,107トン（10%増）に達しました。金地金・金貨の需要が1,217トンと2%増加した一方で、金ETFの保有残高の減少量が2021年を下回った（-110トン対-189トン）ため、総投資需要の伸びに拍車がかかりました。
- 中央銀行の需要（417トン）が2四半期連続で極めて大きく、同セクターの年間購入量は1,136トンと過去最高となりましたが、その大半は未報告のものです。

2023年は、ETFおよびOTCが金地金・金貨の需要のバトンを受け取っています。

- 2023年は投資需要が伸びる見込みです。2022年は金ETFおよびOTCの需要が低調でしたが、好調だった金地金・金貨のリテール需要からバトンを受け取りそうです。欧米市場のリテール投資需要は、インフレ懸念が弱まるにつれて堅調さを維持しつつも減少する見通しですが、アジアでは高成長率を受けて力強さを見せるでしょう。とはいえ、景気後退リスクや地政学的リスクが高まっていることから、金への興味は続く見通しであり、年が進むにつれて有利な兆候

が表れてきています。

- 中央銀行の購入は2022年の水準には及ばないでしょう。合計準備高が減れば、既存の金準備を増やす余地が限られるかもしれません。しかし一部の中央銀行で報告が遅れていることから、予測に大きな不確実性（主にプラスの変動）があることを織り込む必要があります。
- 2022年に底堅さを見せた宝飾品需要がさらに改善すると予測します。ただし、中国には強力なベース効果が生じるものの、世界の景気後退が深刻化して他国で需要が落ち込んだ場合は、この効果が損なわれる可能性があるため注意が必要です。中国経済が再開し、宝飾品分野で抑圧された需要や経済成長に伴う需要が存在することから、歓迎するべき勢いが生まれるでしょう。ただし新型コロナウイルス感染症の再流行が逆風になる可能性はあります。インドの2023年の需要の出足は鈍く、現地金価格の高値が続けば、これが継続するかもしれません。

通年の見通し

- 2023年が金にとって良い1年になるという見解に変更はなく、米国と欧州の景気後退リスクの高まりを踏まえると、下振れリスクよりも上振れの可能性が勝るでしょう。

■主要国需要

	2022年第4四半期			前年同期比		
	宝飾品	投資	合計	宝飾品	投資	合計
インド	219.7	56.4	276.1	-17%	-28%	-20%
中国	135.4	63.6	199.0	-27%	-20%	-25%
中東	46.5	20.0	66.5	2%	29%	9%
トルコ	9.9	29.2	39.1	32%	300%	246%
日本	4.3	-0.7	3.7	-15%	-	17%
米国	50.6	28.0	78.5	-5%	-6%	-5%
欧州	30.7	80.9	111.7	-5%	21%	13%

注1:単位はトン

注2:前年同期比は21年第4四半期と22年第4四半期の比較

注3:中国の需要は台湾・香港を含んだ数値。

■世界金供給

	Q4.21	Q1.22	Q2.22	Q3.22	Q4.22	前年同期比
鉱山生産	938.0	844.2	892.1	945.6	930	-1%
生産者ヘッジ	2.2	10.9	3.7	-10.9	-5.2	---
鉱山生産小計	940.2	855.1	895.8	934.7	924.8	---
リサイクル	295.1	296.0	286.1	269.8	292.3	-1%
供給合計	1235.3	1151.1	1181.8	1204.5	1217.0	-1%

注1:単位はトン

注2:上記のQは四半期

注3:前年同期比はQ4.21とQ4.22との比較

2022年の世界金需要

投資：2023年は上振れの可能性あり

2022年に精彩を欠いたETFとOTC需要ですが、投資が成長する1年に向けて準備は整っているようです。

1年のほとんどの期間で金利上昇と米ドル高という強烈な逆風に直面したにもかかわらず、金のパフォーマンスは安定しており、これが投資家の興味を再びかき立てました。投資家は想定される金利のピークをすでに設定しているため、金利の上昇はそれほど問題にならないでしょう。それに加えて米ドル安の継続、景気後退リスクの拡大、債券と株式の相関性の強さの継続、高まった地政学的リスクが、2023年の金投資の戦術的な正当性を支えたと考えます。

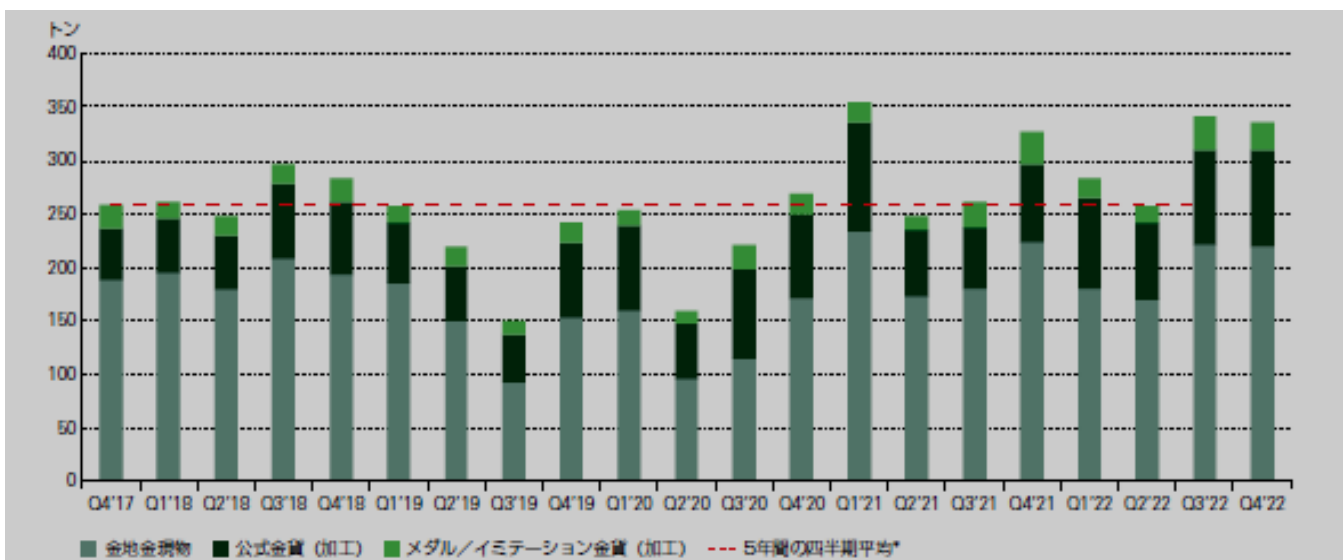
2023年は引き続きインフレ率が低下する見込みです。しかしこのことは、機関投資需要よりも金地金・金貨のリテール投資にとっては逆風になると見ています。2022年は、使用可能なインフレヘッジの代替手段が乏しいことが、アジアや中東の多くの国で強力な金需要を牽引しました。インフレ率が低下すれば、ある程度の需要の減速を予想しなければなりません。しかし金のリテール需要は粘着性を持つ傾向があるため、投資の巻き戻しが生じるとは予想していません。

加工需要：2023年の需要は、底堅くも低調だった2022年の恩恵を受ける

宝飾品需要は、中国経済の再開が主な原動力となって、底堅かった2022年の恩恵を受けるでしょう。景気回復、抑圧された需要、現地価格の安定化によって、2016～2018年に匹敵する需要が生じるはずですが、新型コロナウイルス感染症の収束後の反応が鈍い——欧米で見られたように、同様に抑圧されていた他の商品やサービスへの支出が金への支出を上回る——場合や、新型コロナウイルス感染症が再流行した場合はリスクが残ります。それに加えて、他の地域の景気減速がより深刻だった場合、期待される中国の需要の強さが一部で相殺される可能性があります。

一方、インドは第4四半期が弱く、2023年のスタートも低調だという話があることから、同国の宝飾品需要は予想される中国の成長に及ばないでしょう。婚礼に適した吉日が多く（2022年の55日に対し2023年は67日）、カリフ作物の市場価格が比較的高いことはプラスになるはずですが、現地金価格の高さや長引く農村部のインフレが、ある程度購入を妨げるかもしれません。

インフレ率の上昇に伴い下半期に金地金金貨のリテール投資が活発化



2022年の世界金需要

中央銀行：2022年に並ぶことは至難の業

中央銀行の需要予測は依然として困難です。その1つの理由は、この種の需要が政策主導で発生する場合があります、他セクターの分析に使用する最も一般的な経済要因に反応するとは限らないからです。さらに、保有残高の報告は任意であり、往々にして遅れるため、サプライズが生じる可能性は大いにあるでしょう。しかし合計準備高の伸びが鈍化すれば、中央銀行によっては金準備を増やす余地が減るでしょう。従って2023年の購入はより穏やかなものになると見えています。

投資：金地金・金貨の旺盛な需要とETFの売り越しの縮小を受けて、年間総投資は10%増加しました。

- 世界の金地金・金貨需要は、すでに好調だった2021年の合計からさらに2%増加し、1,217トンになりました。
- 2022年の金ETFの運用残高は、第1四半期に増加したものの、年間では110トン減少しました。ただし売り越しの規模は2021年の189トンを大きく下回りました。
- 年間投資は10%増加して1,107トンでした。

2022年は、金の多様な需給要素が互いにバランスを取り、投資資産として比類のない安定的なパフォーマンスを実現できることを示す手本のような1年となりました。

ETF投資は2021年から改善したものの低調でした。一方、金地金・金貨はリテール購入が力強く、2022年の金需要はわずかに増加しました。ETFに関する心理の弱さは、COMEXにおける資金運用会社の建玉残高にも反映されて、2022年下半年はネットロングとネットショートの間で揺れ動きしました。

金投資は地政学的な状況に支えられたことに加えて、欧米市場を中心とする数十年ぶりの高

インフレ率と、その結果生じたFRBなど各国中央銀行の積極的な利上げの影響を受けました。金地金・金貨の投資家は高インフレ率に注目し、インフレヘッジ目的で金の安全性を求めました。これに対し金ETFの投資家は、世界各国の中央銀行の大幅な利上げと米ドル高騰に伴う金の機会費用の上昇に注目し、特に下半期に運用残高を減らしました。

金地金・金貨

2022年の下半期は需要が特に力強く、2013年以降で初めて、2四半期連続で340トン近辺を維持しました。世界的なインフレ環境を受けて富の保全が必要になったことが、投資目的の金購入の主な動機となりました。

中国

中国の第4四半期の金地金・金貨需要は前年同期比20%減の61トンで、通年では24%減の218トンでした。これは主に、新型コロナウイルス感染症関連の規制が1年を通して実施されたことが原因です。

通年のリテール投資需要は過去10年平均の269トンを18%下回り、同じくロックダウンの影響を受けた2020年の199トンに近い水準です。中国の投資家は2022年のほとんどの期間で自宅を出不れず、一般的にオンラインではなく対面取引で行われる金現物の購入ができませんでした。第4四半期にロックダウン政策が解除されて、通常の投資活動を再開する道が開かれましたが、新型コロナウイルス感染症の急拡大が多くの投資家の動きを妨げたため、需要の不振が続きました。それでも2022年を通して、金に対する投資家の基本的な興味は高い状態が続きました。地政学的リスクと現地通貨安を背景に、金投資商品は投資家のレーダーに映り続けており、「金地金」というキーワードの百度（バイドゥ）指数の平均は2021年を上回りました。そして中国人民銀行の四半期調査によれば、中国の世帯の貯蓄意欲は過去最高水準に達しており、その一部が金に向かう可能性がありそうです。

投資家が新型コロナウイルス感染症の流行の

2022年の世界金需要

波を克服し始めると、春節を控えた2023年1月前半に金投資に対する興味が再び高まりました。中国が再始動して景気が回復することと、商業銀行が金現物商品の販促活動を継続していることが追い風となり、2023年の残りの期間で中国の金地金・金貨需要が回復すると予想しています。投資家の記録的な貯蓄傾向を考えると、安全な避難先としての金の魅力も引き続き投資家を引き付けるでしょう。

インド

インドの年間の金地金・金貨需要は7%減の174トンでした。第4四半期の需要は56トンと健全だったものの、極めて好調だった前年同期の水準に届かず28%減となったことが、年間需要の減少につながりました。

第4四半期初めのダシェラとダンテラスの祝祭の期間は、金地金・金貨の需要が旺盛でした。しかし婚礼シーズンが始まると一特に小売業者が利益率の高い商品の販売を望んだこともあって一金宝飾品に関心が移り、投資需要は二の次になりました。また、11月の金価格の急騰を逃した多くの投資家は、投資を控えることを選びました。業界関係者との議論によると、主に比較的価格が低い（たとえば20グラム以下の）商品が購入されており、これは贈答品に需要が集中していることを示唆します。

2023年のインドの金地金・金貨需要を展望すると、目下のところ国内金価格の高さと株式市場の上昇という逆風にさらされています。またインフレ率の低下により、インフレヘッジという金の役割も薄れるかもしれません。しかし、農村部の需要の回復が2023年の金地金・金貨需要の支えとなる可能性があります。

中東とトルコ

トルコの年間金投資は38%増の85トンで、過去のデータにおいて3番目の高水準となりました。第4四半期の需要が前年同期の7倍を超える29トンに達したことが、年間需要を押し上げました。この大幅な伸びは、基準となる2021年が比較的低調だったことによるものですが、絶対値で見ても四半期の数字は強力であり、過去5年間の四半期平均の17トンを大きく上回りました。

同国内では極端なインフレが生じ、実質金利が大幅なマイナス金利に陥っていることが、引き続き投資需要を牽引しました。需要は10月が特に旺盛で、続く11月と12月は、国内金価格の高騰が制約となって若干減速しました。

中東地域全体の金地金・金貨需要は2022年に42%増加し、78トンと4年ぶりの高水準に達しました。同地域は5四半期連続で大幅な2桁成長となりましたが、これは主に、イランとエジプトの第4四半期の好調さの結果です。

米国と欧州

欧米の2022年の金現物商品の投資需要は、過去最高を記録しました。米国と欧州の金地金・金貨購入量は合計427トンで、これまでの最高記録だった2011年の416トンを上回りました。

米国の個人投資家は2022年に113トンの金を購入しました。これは年間合計としては2021年と2009年に次ぐ3番目の記録です。2021年を3%下回りましたが、これは2022年の需要に何か弱さがあったというよりも、2021年が過去最高だったことを反映したためです。第4四半期の需要は28トンで、2021年初め以降の四半期の平均購入ペースとほぼ一致しました。

米国の投資需要は、年末にかけて、それまでの熱狂的な買いが収まって落ち着いたペースになったようです。そして報告によれば、売り戻しは引き続き限定的でした。このことと供給の改善が相まって、プレミアムは低下しました。

2023年は幸先よくスタートしました。米国造幣局の報告によると、イーグル金貨とバッファロー金貨の月初来の売り上げは、1月の3週が終わった時点で合計6トンを超えました。

欧州の年間リテール投資は前年比14%増の314トンでした。300トンを突破したことは、過去のデータの中では2回しかありません。第4四半期の金地金・金貨需要は前年同期比21%増の81トンで、それまでの3四半期のペースを維持しました。高インフレ率、景気後退懸念（株式への影響を含む）、ロシア・ウクライナ戦争が、引き続きドイツと東欧諸国（特にポーランド）

2022年の世界金需要

ド) で金購入を後押ししました。

第4四半期には、現地通貨建ての金価格も投資の流れを促しました。11月から12月はユーロ建てとスイス・フラン建ての金価格が比較的安定していたため、現地通貨建て価格が米ドル建て価格の上昇に追従して回復する可能性に期待する投資家の金購入が促進されました。そして実際に、1月はそのような価格動向が見られません。

2022年の中央銀行の金需要は過去最高を記録しました。

- 2022年の中央銀行の需要は合計1,136トンで、過去最高を記録しました。
- 金保有の主な理由として、地政学的な不確実性と高インフレ率が注目を集めました。
- トルコや中国など、主に新興国の中央銀行で金購入が発生しました。

中央銀行の需要は、2年前に過去10年の最低値を記録した後、力強く回復しています。2022年の同セクターの買い越しは合計1,136トンで、2年連続で前年を上回りました。2022年は中央銀行の金購入の当たり年となりました。13年連続の買い越しとなっただけでなく、第3四半期と第4四半期の需要がともに400トンを上回ったため、年間需要は1950年までさかのぼるデータの中で2番目の記録となりました。

中央銀行の第4四半期の買い越しは合計417トンとなり、下半期の購入量は合計862トンに達しました。第3四半期と同じく、第4四半期のデータも、報告済みの購入量と、かなりの規模の未報告購入量の推計値を足し合わせたものです。未報告の活動に関する情報が入手できるようになった場合、中央銀行の金準備の年次調査は、中央銀行に金保有を決定させる主な2つの要因を強調します。それは危機時の金のパフォーマンスと、長期的な価値の保全手段としての役割です。地政学的な不確実性と激しいインフレに見舞われた1年に、中央銀行が速いペースで金準備を追加し続けることを選んだのは不思議ではありません。

中国は2022年に金購入を再開しました。年末にかけて、中国人民銀行が2019年9月以来となる金準備の追加を報告するという、この年で最も重要な発表がありました。11月と12月の発表によると、同銀行は合計62トンの金を購入し、金準備が初めて2,000トンを超えました。中国は2002～2019年に1,448トンの金を蓄積しており、歴史的に金を大量に購入する国というポジションだったことを考えると、これらの発表には大きな意味があります。

しかし報告によると、2022年に最も金を購入したのはトルコ中央銀行です。トルコの公的な金準備は148トン増加し、過去最高の542トンに膨らみました。

地域別に見ると、2022年は中東の中央銀行の金購入が活発でした。エジプト（47トン）、カタール（35トン）、イラク（34トン）、アラブ首長国連邦（25トン）、オマーン（2トン）が金準備を大幅に増やしました。

インド準備銀行は2022年も引き続き金を購入し、33トンを追加しましたが、2021年の購入量の77トンからは57%減少しました。この年、インド・ルピーを支えるために為替市場に介入した結果、外貨準備が700億米ドル減少したことが、同銀行の金購入に影響を与えた可能性があります。現在の同銀行の金準備は787トン（準備資産全体の8%）です。

ロシア中央銀行（CBR）は、国際的制裁措置を課せられたことを受けて、国内生産者からの金購入を再開することを発表しました。しかし1月に金準備が3トン減少したのが最後で、それ以降のデータは報告されていません。

今後の見通しとしては、中央銀行が金に対するポジティブな姿勢を維持し、2023年も買い越しが続くことを疑う理由はほとんどありません。

銀行恐慌？！

最近のアメリカの銀行破綻に関するコラムを紹介します。

銀行恐慌？米連邦準備制度理事会は米国債利回りを超える水準へ政策金利を引き上げました

2023年の銀行業界へ急激に広がった懸念の中で、これまでに破綻した銀行、破綻に直面した銀行は、どの程度経営不振だったのでしょうか。

大雑把に言えば、銀行は預金を預かり、融資を行います。利益を出すには、預金の利子を融資の利子より少なくすればいいのです。簡単でしょう？しかし、そうではないようです。

◆ シリコンバレーバンク (SVB)

SVBは、資金が潤沢で融資を必要としない多くの技術系新興企業から多くの資金を調達していました。そこで、SVBは収入を得るために、長期の債券、主に米国債を購入しました。国債は金融界で最も安全なものです。しかし、インフレが加速して連邦準備制度理事会が史上最速のペースで金利を引き上げると、国債は値崩れしました。その結果、どうなったのでしょうか。SVBの政府への融資（＝米国債の購入のこと）は、預金者が支払うべき金額に見合うものではありませんでした。少数のベンチャーキャピタリストがWhatsApp（メッセージングアプリ。日本でいうとLINEのようなアプリ）にアクセスして「火事だ！」と叫ぶと、多くの人々が預金を引き出すことになったのです。

◆ シグネチャー・バンク

暗号資産会社から多くの現金を受け取りながら、ニューヨークの不動産へ資金を貸し出し、暗号資産会社の顧客が暗号通貨を24時間いつでも米ドルに変えられるように、彼らに決済プラットフォーム（シグネットと呼ばれる）を構築もしていました。

SVBと同様、多くの顧客が同じビジネスを同時に行うという「集中リスク」は、金利が上昇し、暗号資産が崩壊すると、その預金者全員が資金を必要とするようになったことを意味します。また、同じ理由で、多くの借り手（NYの不動産業者）も突然経営基盤が不安定になり始めました。

そして、政府保証が必要であるにもかかわらず、その保証がないことに気づいた大口預金者が、預金の引き出しに殺到することになりました。（シグネットを利用するには25万ドル以上の残高が必要だそうで、しかし、預金保護の対象は25万ドルまで。25万ドル以上は保護されないと気付いて預金の引き出しに殺到。）

◆ ファーストリパブリック (FRC)

米国の保険上限額を超える預金が多く、人々が心配し始めたら預金引き出しが殺到する

銀行恐慌？！

可能性がありました。そして、その預金の多くを長期債に預け、短期金利とともに利回りが上昇するように債券価格が下落したため、価値が急落することになりました。

そのため、人々は慌てて預金引き出しに殺到しました。1月中旬に発表されたFRCの2022年度決算は、一見するとかなり好調に見えたのですが。

CEOによれば「今年も安全で安定した有機的な成長で素晴らしい1年だった。」のです。

しかし、預金残高の3分の2以上がFDICの保証対象外であったため、銀行恐怖症が蔓延し、預金は急激に流出し、株価は低迷した。

創業者、その義弟、息子に多額の給与が支払われていたことが明らかになったことも、マイナスでした。また、米国の大手金融機関11社が（政府主導で）信頼感を示すためにFRCに預けた300億ドルも、株価下落を食い止めるには何の役にも立たなかったというのが実情でした。

◆ クレディ・スイス（CS）

上記の米国での最初の2つの犠牲者となった銀行や危機的状況に陥ったFRCよりも非常に規模が大きい。CSは非常にひどい経営状態だったのです。数々のスキャンダルの中で空回りし、CEOを交代させ、全く新しい計画を発表し、投資家を脅かし、2022年には70億ドル以上の大損失を出し、その額はスイスのライバル（そして現在のオーナー）UBSの利益とほぼ同額でした。

しかし、CSのスキャンダルは今に始まったことではなく、スキャンダラスな銀行業務において、CSだけが一人歩きしていたわけではありません。しかし、昨秋から預金を引き出す流れが加速し、10-12月だけで1200億ドルの預金引き出しがあったとのこと。この銀行の最大の出資者であるサウジアラビアの国営銀行、サウジ・ナショナル・バンクの社長が、この銀行の事業を維持するためにこれ以上資金を提供するかという質問に対して「ノー、絶対にノー」と答えていたことも痛手となりました。（その後、彼は「個人的な理由」で「辞任」しています。）

これらの不運な結果を招いた銀行では、いくつかの共通点が目立っています。

第一に集中リスク： あなたの取引銀行は、融資であれ預金であれ、同じ種類の顧客すべてにサービスを提供していますか？同様に重要なのは、保険で保証されていない預金はどれくらいあるかということです。預金は最も早く動きます。

第二に、規制当局への反発： シリコンバレーバンクとシグネチャーバンクは、金融危機後のドッド・フランク法で定められた500億ドル以上の超大型銀行になるためのルールや監督に関わる手間やコストを避けたいと考えていました。しかし、彼らは自らの規模に上限を設けるのではなく、基準値を引き上げてもらうよう働きかけました。トランプ政権は2018年に義務づけ、「監督強化」の最低水準を2500億ドルに引き上げていました。

銀行恐慌？！

第三に、老舗やブランドを単純に信じてはいけない：クレディ・スイスは1856年に設立され、山に囲まれた国の安定、安全、安心の代名詞となった。SVBは約40年の歴史を持ち、今年の新年には米国で16番目に大きな銀行に成長していました。（しかし、議員には「本当は そんなに大きくない、ビッグバンク規制が必要なほどの規模ではない」と繰り返し語っていました。）

ファースト・リパブリックは1985年に設立され、シグネチャーバンクはもっと波瀾万丈な歴史を持ちますが、2001年の設立以来、米国で19番目に大きな銀行に成長し、共和党のバーニー・フランク元議員を取締役に迎えています。

（金融危機後のドッド・フランク法の名前が由来している一人で、「最後の戦いに挑む」と米国の銀行をより安全なものにすると主張していました。彼は今、連邦政府が自分の銀行を閉鎖し、その資産、つまり誰もが買いたいと思うような資産を売却したことに **ひどく怒っています**。それが銀行業界全体のパニックを引き起こす恐れがあったからです。）

これまでの経緯は以上です。それでは、今後はどうなるのでしょうか？

もしかしたら、2023年の銀行危機は3月の数週間しか続かなかったのかもしれませんが。しかし、15年前にベア・スターンズについてそう言った人もいました。そして、今日、コンプライアンスや多様性に優れ、資本力のある銀行であっても、本当の問題はまだ起きていないのです。

なぜなら、融資残高が未だ健全な状態を保っているからです。融資残高が不調を起こしはじめたとき、本当の銀行危機がくるのです。銀行危機はこれからなのです

「何か変よ！彼らのお金を 銀行が引き出させないの。」と、メリー・ポピンズの中で銀行で列に並んでいた女性が、子供のお金にまつわる騒ぎを半ば聞き流しています。

「私は自分のお金を取り戻すわ。」と隣のおばさんが言う。そして、この物語の中ではフィデリティ・フィデューシャリー・バンクの崩壊寸前が始まりました。

ベア・スターンズが2008年3月に破綻した際、その9カ月前に同社が保有する有害債権デリバティブが見出しを飾った際は馬鹿げたことだと思ったことでしょう。

しかし、2023年3月の数週間で、米国の小規模銀行の預金者は、過去最高の1070億ドルを口座から引きだしました。これは、世界的な大企業であるクレディ・スイスが2022年の最後の3ヶ月間に失った金額のほぼ相当します。

最終的な分析では、取り付け騒ぎとは、預金者が善悪は別として銀行の債務者が融資を返済しないことを恐れて預金を引き出し、銀行を去り、銀行が貯蓄者に返済するのに十分な現金がない状態になることを意味します。

この悪い魔物は、今一度、瓶から解き放たれたようです。欧米の銀行市場では、まだ融資の不調は始まっていません。しかし、債券市場は、米国の景気後退が私たちに迫っていると言っています。融資の不調が起こり（借りた人が返さない＝債務不履行、不良債権化）銀行危機が眼前に迫っているのかもしれませんが。

Gold Link

編集後記

今話題のチャットGPT（生成型AI）を試してみました。以下の質問をして、得られた回答です。

質問：「ゴールドの最近の値動きと今後の見通しについておしえてください」

回答：「2023年4月15日現在、ゴールドの価格は1オンスあたり約1,785ドルです。2022年に入ってから、ゴールド価格は比較的安定しており、1,700ドルから1,900ドルの範囲内で推移しています。しかし、過去数か月間は比較的弱い動きが続いており、COVID-19パンデミック以降の高値である2,000ドルを超えることはありませんでした。

今後の見通しについては、金価格は複数の要因によって影響を受けるため、予測が難しいとされています。一方で、世界的なインフレーションの増加、中央銀行の金融緩和政策、政治的不安定などの要因により、金価格が上昇する可能性があります。一方で、経済成長の回復や金利の上昇など、金価格を下押しする要因も存在します。」

回答の内容は、古く不正確です。ただ数秒で上記の答えが返ってきました。（正直もう少しまともな回答が返ってくると思っていましたが・全然ダメな結果でした）

まだまだ当社の営業担当のほうが優秀で足元にも及ばないレベルでした。

これからも最新情報を随時手に入れ、分析しお伝えしていきます。引き続きよろしくお願ひします。

ホームページもご覧ください。

<http://www.goldsumitatekun.com>

株式会社ゴールドリンク

 Gold Link Corporation

東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号

多幸ビル九段10階

電話 03(5275)5588

FAX 03(5275)5677

Email: info@goldsumitatekun.com



GOLD FOURSEASONS REPORT

2023年春号

2010年9月1日創刊 2023年4月27日発行 通巻第49号

●本誌に掲載されている情報は内容が正確であるよう最善を尽くしておりますが、内容についての一切の責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている情報に基づいて投資活動を行った結果、損害が発生したとしても、弊社はその責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている内容の著作権は、株式会社ゴールドリンクに帰属します。弊社に無断で転用、複製等することは固くお断りします。